

病態形成に関わる生体機能因子の探索並びに 機構の解析に基づく医薬品開発研究



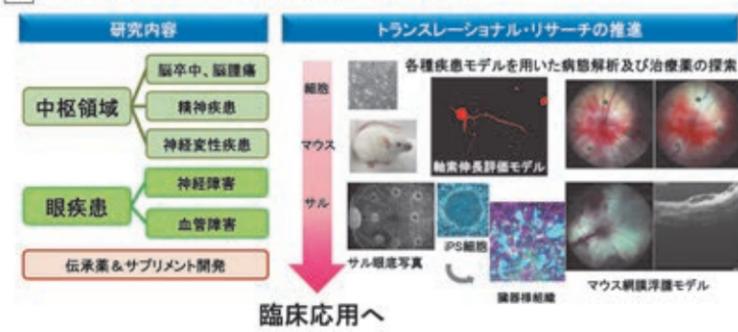
開発研究として、中枢神経疾患および網膜疾患に関する病態解明ならびに治療薬の開発の研究を基盤に、臨床開発・上市を目指してきた。これまで2種類の新型薬(片頭痛治療薬、緑内障治療薬)を創出し、上市に近づけることができた。基礎研究としては、諸種の遺伝子改変動物や臨床サンプルを用いて、中枢神経系および眼科系の病態形成に関わる生体機能因子の探索ならびに機構の解析を行ってきた。ヒトや動物由来細胞培養系およびヒト疾患 iPS 細胞を用いて病態を反映し

薬学会賞受賞研究

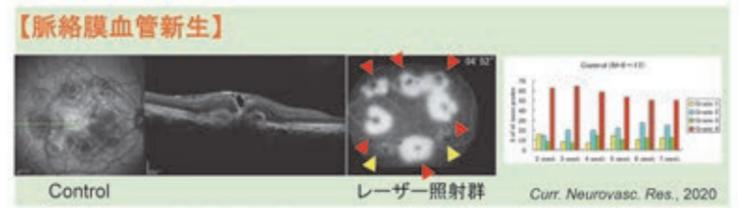
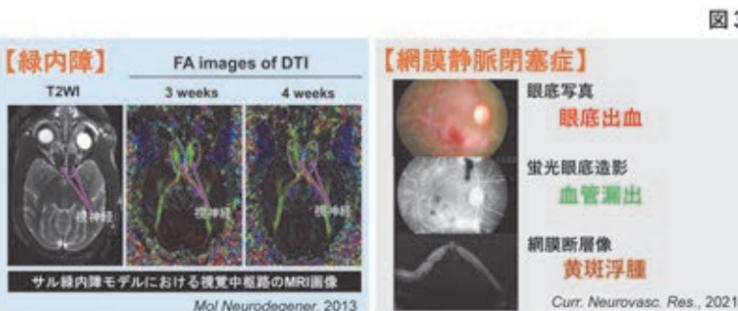
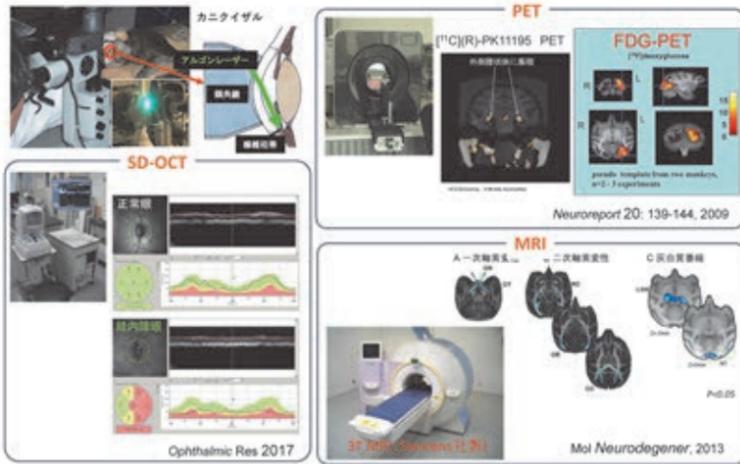
関連記事11~14面

岐阜薬科大学学長
原英彰

- 図1
- 1 緑内障、加齢黄斑変性、網膜静脈閉塞症などの眼疾患に関する病態解明及び創薬研究
 - 2 脳卒中及び精神疾患などに代表される中枢性疾患に関する病態解明及び創薬研究
 - 3 iPS細胞など幹細胞を用いた病態解明及び創薬研究
 - 4 伝承薬及びサプリメントの新規薬理作用に関する研究



臨床への外挿性の高いカニクイザルを用いて慢性高眼圧モデルを確立し、網膜障害の臨床診断に用いられる画像診断装置および京都大学霊長類研究所と共同で開発した視野測定系を



代謝の低下および萎縮、加齢に伴う網膜・視神経の変性に伴い、網膜から大脳視覚野の中継路である外側膝状体の変性、大脳視覚領域の脳

代謝の低下および萎縮、加齢に伴う網膜・視神経の変性に伴い、網膜から大脳視覚野の中継路である外側膝状体の変性、大脳視覚領域の脳 I)を用いて、緑内障早期より網膜・視神経の変性に伴い、網膜から大脳視覚野の中継路である外側膝状体の変性、大脳視覚領域の脳

どの、様々な血管新生制御因子の探索研究を進めてきた。また、カニクイザル(図3)に加えてマウスの滲出型加齢黄斑変性や網膜静脈閉塞症の各モデルを確立した。これらモデルを用いて、医薬基盤研究所と連携して細胞増殖因子Hb-EGFを標的としたオリジナルの抗体医薬品の創成に成功し(A MED創薬総合支援事業)、現在ヒト化抗体を作製している。また、AMED拠点研究事業の支援により Growth Differentiation Factor-15 (GDF-15)が眼内の線維化形成に関与することを発見し特許を取得し、米国のベンチャー企業と共同でヒトに投与可能な抗GDF-15抗体の開発を進めている。

薬事日報社

(企画推進部)

SNS

好評配信中



X (旧 Twitter)

新聞記事ピックアップや書籍案内など毎日つぶやきます！
たまの独り言はご愛敬w



Instagram

新刊・好評書など書籍情報を配信。
ストーリーで医薬関連展示会などの状況配信をすることも！



LINE

週イチで薬事日報のヘッドラインニュースをまとめ配信！
トピックスも随時配信



ぜひフォロー＆友だち登録してください！

